

心の才能を持って
海外へ飛び出そう！

「人を育てることは、答えの決まっていない応用問題」

◎井村 雅代 ●一般社団法人井村シンクロクラブ 代表理事
関西大学客員教授

◎楠見 晴重 ●学長

シンクロナイズドスイミングがオリンピック種目になってから、日本代表コーチとして常にメダルを獲得してきた井村雅代さんは、北京オリンピックでは中国チームを指導した。世界のトップを目指し、人を育ててきた人は語る。「心の才能」さえあればいい。若者よ、海外へ飛び出せ！その体験が人生の永遠のエネルギーになるだろう」と。

◆自分の頭で考えないと向上しない

楠見 今回の対談のゲストは、オリンピックのシンクロナイズドスイミングで7大会連続メダル獲得という偉業を成し遂げ、多くの選手を育ててこられた井村雅代先生です。井村先生には、昨年より関西大学の客員教授を務めていただいております。

実は私は中学時代、水泳をしていました。また、地盤環境工学が専門で、地下水が研究テーマの一つです。水のご縁で伺いますが、シンクロの選手は世界各地でさまざまな水に接し、その違いを体感されているのでしょうか。

井村 シンクロは競泳などに比べると、水を操ることが上手でないとできない種目です。だから、水にはとても興味があります。スペインで試合をしたときには、海水が混じっていて、浮きすぎて困ったことがありました。深さによって水圧が変わりますし、軟水・硬水によっても、また太陽の光の量によっても変化します。

立花美哉や武田美保など、世界のトップレベルになると、この水は軽い、重たい、ぬるぬるして手に絡みつくとか、そういうことを言います。水の状態に合わせて最後の調整をします。そうになったら一流ですね。

楠見 そういう微妙な違いを肌で感じられるのでしょうか。

井村 日本が強かった時代は、かなりの選手が感じていましたが、今は少なくなりましたね。それぐらい微妙なものなのです。

楠見 昔と今と、決定的に違うのは何ですか。気質の違いでしょうか。

井村 選手はいつも一生懸命なんです。その前に立つ指導者が、何を指すかだと思います。確かに今は保護者との関係も変わってきて、「ついて来い」だけではいなくなった部分はあります。しかし、大事なことは、前に立つ人間がその子をどうしたいか、です。また、選手に考えさせることも必要です。自分で考えないと、向上していかないと。

楠見 それは教育にも通じる場所がありまして、小中高の教育では、答えが出るようなことを教えられて、受け身でいいわけです。ところが、大学に入ると、答えがいくつもある場合や、答えがない場合もあって、自分の頭で考え、自分で答えを見つけていかなければなりません。

◆“心の才能”があればルックスはどうでもいい

楠見 井村先生には昨年一昨年と2回、本学で講演していただきました。世界を舞台に活躍してこられた体験談は、学生にはいい刺激になったと思います。お話の中で、“心の才能”が大事であることを強調なさっていましたね。

井村 フィギュアスケートもそうでしょうか、シンクロ選手を見て、足が長いとか、顔がきれいとか、スタイルがいいとか、体が柔らかいとか、世間はそんなことばかり評価します。そんな才能はあるに越したことはないけれど、もっと大事なものがあつたのです。

何がいちばん大事かという“心の才能”です。できなかったら「自分はだめだ」というのではなく、「自分の努力が足りなかったんだ」、「頑張り方が足りなかったんだ」と考えられる。それが心の才能です。「もっと努力すればいいんだ」、「もっと頑張ろう」と思える人が、心の才能のある人です。分からなかったら「分かるまで勉強しよう」、「分かるまで先生に聞こう」。その思いがあつたら、人を必ず動かします。そういう学生・生徒と接するのは、指導者冥利ですよ。



私はコーチを始めて37年ほどになりますが、オリンピックのメダルもいけれど、何がいちばん面白くて魅力かという、できなかった子ができるようになって、うれしそうな顔をする、人間性が変わって自信を持って輝いてくる、かわいくて生き生きしてくる、それを目のあたりにすることです。

ルックスなんてどうでもいいのに、若者たちはそれを気にして自分はだめだかと思ってしまう。心の才能があつたら、短い足を長く見せる方法なんていくらでも教えてあげます。顔は関係ありません。なぜなら、顔は本当に心が反映するからです。オリンピックのメダリストの顔を見てください。男子はみんなかっこいい、女子はみんな美しく輝いていますよね。心が反映しているからです。いちばん大切なのは、心の才能なんです。

◆世界のトップは想像を超える

楠見 今の学生は、どちらかと言うと内向きになってきているのですが、大学4年間にできるだけ海外を経験し、文化を異にする人たちとコミュニケーションを図ってほしいのです。井村先生がおっしゃったような評価基準や価値観なども含めて、海外では「そうじゃない」ということを知ることが大事なんです。

井村 シンクロで日本が最も強かった時代の選手を、どうやって育てたかという、まず外国へ行くときに食べ物はお餅以外には何も持っていきませんでした。シンクロの選手は一日に5000キロカロリーを摂ります。水の中で多い日は13時間ぐらい、普段でも8時間以上、さらに水から上がっても練習があります。そうしたら痩せるわけです。トレーニングで痩せると、

■対談



人間が嫌いな人が先生になったらだめです。そんな先生に教えてもらう学生や子どもたちは、大きな迷惑です。そして、指導者は人の気配を感じられる人間でなかったらだめです。

井村 雅代 (いむら まさよ)

1950年大阪府生まれ。小学生のころから浜寺水練学校で水泳を習い、中学生になってシンクロナイズドスイミングを始める。天理大学卒業。選手として日本選手権チームで2度優勝し、公開競技として行われたミュンヘンオリンピックに出場。中学校の保健体育科の教諭を務めた後、シンクロ指導者となり、78年から日本代表コーチに就任。85年井村シンクロクラブを創設。シンクロナイズドスイミングがオリンピック種目になってから、7大会連続メダル獲得を成し遂げ、奥野史子、立花美哉、武田美保など、多くのオリンピック選手を育てる。北京オリンピックで中国の代表コーチを務め、チーム種目銅メダル獲得に導いた。2010年関西大学客員教授。朝日スポーツ賞など多数の賞を受賞。著書に「愛があるなら叱りなさい」「あなたが変わるまで、わたしはおきらめない」など。

筋肉が落ちないで脂肪が落ちます。脂肪が落ちれば沈む。今まで浮いていたのに沈むようになれば、手を素早く動かさなければいけないし、テクニックが変わる。だから痩せないために、寝る前にお餅を食べさせるのです。

私は海外で日本食屋さんには連れていきません。たいてい高いだけで、おいしくないでしょう。向こうの人は現地の食べ物を食べて、いい記録を出しているのだから、そのものを食べよう。世界中どこでも、パンとバター、チーズ、卵、ハムなどは必ずあるから、買いにいけばいい。それも楽しいし、カロリーや栄養のバランスを考えて選ぶ力もつく。そうやって育てた選

手はやっぱり強いです。

楠見 そういう練習を続けるのは、金メダルを取るため、世界で1位になるためなんですね。井村先生は講演で「銀メダルは狙うものではなくて、金メダルに挑戦した人の残念賞」とおっしゃっていました。それは研究の世界にも通じることで、国内ではなくて世界を見て、自分の研究が先端からどの辺にあるのかを知らないといけない。研究者は過去のモデルのまねをしていたら、同じものしかできない。スポーツの選手と研究者は、似ているところがありますね。

井村 そう思います。例えば、高橋君や織田君のフィギュアスケートの演技は、次の冬季オリンピックでどう進化するのか。世界中の観客の想像を超えて、「こんなこともあるのか」と思わさないとだめです。3回転から4回転になるのは普通の路線で、すごいと思うけれど、決してサプライズじゃない。昔、テレビでオリンピックの体操を見ていて衝撃だったのは、アメリカの選手が大車輪を片手でやったときです。両手ではなく「片手もありなんや」と。そういう発想ができる人間にならないとあかんなど。柔軟な頭を持ち、世の中の流れを感じ、風を感じるような人間を育てなければと思います。

◆留学生の受け入れ態勢を整備

楠見 関西大学は全学で国際化を進めていまして、多くの留学生に来てもらうとともに、日本人の学生がどんどん海外に出ていけるように、1年次から英語教育に力を入れています。

井村 言葉のハンディは、日本人だけでなく、中国人にもあるし、どこの国の人にもあります。ロシア人だって、英語に対するハンディを感じています。中国のナショナルチームでいちばん若かった上海の選手は、北京の言葉がほとんど分かっていませんでした。「あなたの北京語の力は私と同じぐらいね」と言ったほどです。英語もそのうちに上手になればいい、伝えようとする思いのほうが大なんだから、ということが分かればよいのです。



楠見 それは身をもって海外を経験されているからです。私もイギリスにいたとき、スコットランドの人とイングランドの人は、同じ英語でも通じていないのを知り、ああこんなもんかと思いました。若い人たちにも、我々が体験したことを体験してほしいのです。

本学には世界中から留学生が来ていますが、やはり多いのはアジアです。今年1月には、上海の復旦大学内に本学の上海事務所を開設しました。また来年の4月には日本語教育センターの機能を備えた「南千里国際プラザ」と「留学生別科」(11ページ参照)を開設する予定です。

井村 外国から日本に来る人は、勉強して知識を豊かにすることが目的ですから、思いっきりしごけばいいと思います。そうしなかったら、日本の教育が世界から見くびられてしまいます。

楠見 日本の学生たちにとっても、よい刺激になるはずで。これからの大学の社会貢献は、日本国内にとどまらず、世界や地球社会に対しても、どう貢献するかを考えていかなければなりません。

◆海外体験が人生の永遠のエネルギーになる

井村 なぜ私はこんなに長い間コーチをしているのかというと、それは人間が好きだからです。ただかわいいだけの子どもが一人の立派な女性になっていくのを見届けられること。それがコーチとしての醍醐味です。人を育てるのに誰にもあてはまる正解、いつも同じ答えはないんです。昨日この子にびつたり言葉は、今日はもう合わなくなっています。同じ子に明日はまた違うことを言わなければならない。人を相手にすれば、いつも応用問題です。それがすごく面白いのです。私はそういう仕事が好きなんです。

人間が嫌いな人が先生になったらだめです。そんな先生に教えてもらう学生や子どもたちは、大きな迷惑です。そして、指導者は人の気配を感じられる人間でなかったらだめです。分かったと言いつつ、不満いっぱいでも納得していなかったり、気持ちが弾んでいなかったりする子がいます。相手の気配を感じようと思ったら、日ごろから生活の立ち居振る舞いも見ておかなければなりません。授業や練習のときだけ、その子にフィットしたものにしようとしても無理です。ちゃんとその人の人格を認めて、個人個人を見つめているということが、指導者としていちばん大事なことだと思います。

楠見 そのことは、我々も少人数のゼミや研究室の中で感じていることです。また、スポーツで入ってきた学生にも、文武両道はもちろんのこと、スポーツを通じて人格を形成するようにと言っています。

最後に、関西大学の学生諸君に、ひと言お願いします。

井村 関西大学のキャンパスに行ってみて、一生懸命青春している学生がたくさんいて、いいなあと思いました。文武両道で頑張るのもいいし、朝から晩まで勉強してもかまわない。その環境が整っています。だけど、絶対に海外へ飛び出してください。外国へ行って初めて、自分の国の素晴らしさを知るので。私は中国へ行って、日本人のこまやかな心遣い、おもてなしの心

は、なんてすてきなんだと思いました。また、孤独にも強くなりました。

無人島ではなくて人が住んでいる所へ行くのだから、大丈夫。あなたも人だから住めるはず。関西大学の学習環境にも感謝できるし、日本人であることに誇りを持てます。そこで生きたということが、自信にもなります。ただ、行って楽しもうという考えは間違っています。初めはぎくしゃくしても、だんだん自分の生活のスタイルを見つけていったら、そこで得たものは一生の宝になり、自分の人生の永遠のエネルギーになるのです。人生は長いから、1年2年まわり道したとしてもどうってことない。今しかできないことをしてください。

楠見 本学の客員教授として、これからも関大生にそのような思いを伝えていっていただきたいと思っています。

国内ではなくて世界を見て、自分の研究が先端からどの辺にあるのかを知らないといけない。研究者は過去のモデルのまねをしていたら、同じものしかできない。



楠見 晴重 (くすみ はるしげ)

1953年大阪府生まれ。78年関西大学工学部土木工学科卒業。81年同大学院工学研究科博士課程後期課程中途退学。82年関西大学工学部助手。専任講師、助教授を経て、02年教授。07年環境都市工学部教授となり、同年4月から学部長に。09年理系出身者初の関西大学学長に就任。学校法人関西大学理事。文部科学省大学設置・学校法人審議会委員、社団法人日本私立大学連盟常務理事、財団法人大学基準協会理事、土木学会フェロー会員、岩の力学連合会副理事長ほか。共編著書に「地図環境情報学 地下を診る最先端技術」など。